

厚生労働科学研究費補助金

(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))

(総括・分担) 研究報告書

群馬県精神科入院患者の骨粗鬆症ならびにロコモティブシンドロームの実態調査

研究分担者 飯塚 伯 群馬大学 准教授

研究要旨

本研究の目的は、精神科入院患者の骨粗鬆症、ロコモティブシンドローム(ロコモ)などの整形外科的疾患の実態を明らかにすることである。

A. 研究目的

本研究の目的は、精神科入院患者の骨粗鬆症、ロコモティブシンドローム(ロコモ)などの整形外科的疾患の実態を明らかにすることである。

B. 研究方法

サンピエール病院精神科入院患者74名および外来患者76名のうち、重症関節リウマチや悪性腫瘍の既往等を除外した143名を対象として骨粗鬆症の評価を行った。骨密度の測定(腰椎、大腿骨頸部)と既存脊椎圧迫骨折により骨粗鬆症の評価を行った。骨粗鬆症と診断された精神病患者を対象に活性型ビタミンD3単剤または活性型ビタミンD3単剤とデノスマブの併用による治療介入を行い、骨密度および骨代謝マーカー(TRACP-5b、total P1NP)の経時的変化を評価した。長期入院中の統合失調症患者62名を対象にucOCと25(OH)Dの測定を行った。ロコモについては、精神科入院患者56名および外来患者69名を対象としてロコモ25によるロコモの評価を行った。

(倫理面への配慮)

本研究は、ヒトを被験者として相手方の同意と協力のもとに実施する研究であるため、被験者の人権ならびに安全性の確保のために特段の配慮を行った。研究プロトコルは各施設の倫理委員会に申請し、承諾を得た。本研究が人権保護実験の事前に書面にて実験内容および注意事項を通知し、被験者の自由意思による同意書への署名・捺印をもって同意を得ることとしている。被験者には実験中いかなるときも自らの意思によって実験を中止できることを周知徹底している。実験結果の公表に際しては個人の特定が行えないよう配慮するとともに、データ分析時にも個人名が特定できないよう個人情報情報を管理している。

C. 研究結果

入院患者と外来患者をあわせた全患者の48.9%、入院患者の67.7%で骨粗鬆症を認められた。骨粗鬆症の有病率について一般住民の有病率との比較では、男性では60歳以降の全ての年代で高く、女性では60歳代と70歳代で高かった。デノスマブと活性型ビタミンD3による治療を行った患者17名は12か

月以降にベースラインと比べて有意な骨密度の増加を認め、骨代謝マーカー(TRACP-5b、total P1NP)は3か月以降ベースラインと比べ有意に低下していた。一方活性型ビタミンD3単剤の患者10名は6か月までは有意な骨密度増加を認められたが、12か月、18か月、24か月の時点でベースラインと比べて有意な骨密度の増加を認めず、骨代謝マーカー(TRACP-5b、total P1NP)についてもベースラインと比べて有意な変化は認められなかった。ucOCの女性33名の平均値は4.77 ng/mlであり、ビタミンKの投与が推奨される値4.5 ng/ml以上であった。25(OH)Dでは61名の平均値は8.49 ng/mlであり、ビタミンD欠乏のカットオフ値である20 ng/ml未満の値であった。入院および外来の患者125名中58名(46.4%)がロコモと判定された。入院患者と外来患者の比較では、入院患者に有意にロコモが多かった。

D. 考察

骨粗鬆症有病率は外来患者に比べ入院患者で高く、一般住民に比べ若い年代から骨粗鬆症になりやすい。適切や薬物療法により精神病患者の骨粗鬆症は治療可能である。ビタミンKおよびビタミンDが欠乏している精神病患者が多い可能性が示唆された。外来患者に比べ入院患者では運動機能が低下していることが示唆された。

E. 結論

精神科入院患者は、外来患者に比べて骨粗鬆症とロコモの有病率が高かった。精神病患者ではビタミンKおよびビタミンDが欠乏している患者が多いことが示唆された。

G. 研究発表

1. 論文発表
原著論文 4件
2. 学会発表
口頭発表 10件

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む.)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

